

# 資料紹介 犬養毅旧蔵「紀泰山銘拓本」

寺前公基

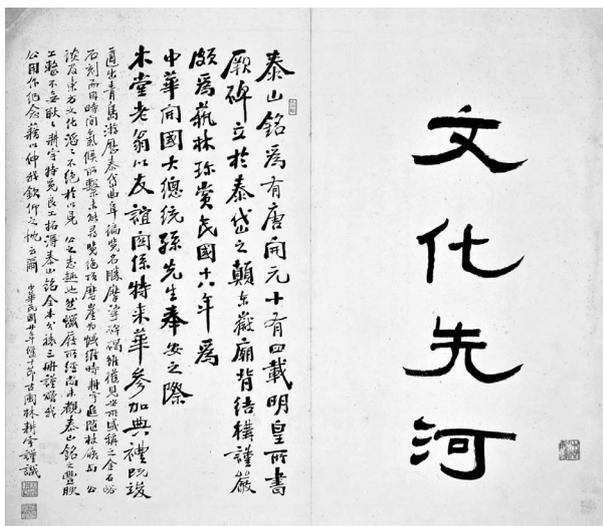
## はじめに

観峰館の本館1階の避暑山荘展示室には、紀泰山銘拓本が常時展示公開されている<sup>①</sup>。紀泰山銘とは、唐時代の六代皇帝・玄宗が撰文し書いたもので、山東省の泰山の崖に刻まれた磨崖碑である。高さ約十三・三メートル、幅約五・三メートルの泰山中最大級の碑であり、雄大な隷書で書かれた書体は、玄宗の代表作の一つとなっている。

紀泰山銘は、当館の他、成田山書道美術館<sup>②</sup>、東京国立博物館に各々所蔵されており、後者は、二〇一九年特別展「顔真卿―王羲之を超えた名筆―」(No.57)にて展示公開された<sup>③</sup>。その壮大なスケールのため、国内でも希少な拓本<sup>④</sup>について、当館には、他に冊となった二本の法帖を所蔵している。一本は五冊本<sup>⑤</sup>であり、一本は三冊本であり、いずれも実在の碑より採拓されたものと確認できる。

この内、後者の三冊本には、表紙裏の白紙部分に跋があり、また「木堂図書」の蔵書印が押されている。この印は、犬養毅(一八五五―一九三二)の所蔵を示すものであることは自明であり、犬養に寄贈された冊であることは跋からも読み取ることができる。

そこで本稿では、この貴重な法帖について紹介し、その制作経緯について若干の考察を試みることを目的とする。



同 跋文



紀泰山銘 表紙  
(碑一大一002)

## 一、資料の概要

先ず、基本情報を提示する

【資料番号】 碑—大—002

【資料名】 紀泰山銘

【制作年】 昭和六年（民国二十年・一九三二）

【法 量】 各七五・七×四三・四センチ

（一紙 六七・七×三七・九センチ）

【材質技法】 布扉、紙本墨拓

【備 考】 外題、跋有り。蔵書印有り。

各冊には、「泰山銘 上册 林耕宇題」（第一冊）とあり、二種の印が押される。

次に、跋文の全文を載せる。

### 文化先河

泰山銘為有唐開元十有四載、明皇所書。

厥碑立於泰岱之顛東嶽廟背。結構謹嚴

頗芸林珍賞。民国十八年為

中華開国大總統孫先生奉安之際、

木堂老翁以友誼關係、特來華參加典禮既竣。

道出青島、游歷泰岱曲阜、徧覽名勝、摩挲碑碣。雖獲見世所盛

称之金石峪

石刻、而因時間氣候所繫、未能尋覽絕頂磨崖為憾。維時耕宇追

隨杖履、与 公

談及東方文化滔々不絶。於此見 公之志趣也。然蠟屐所經、尚未親泰山銘之豐腴

工整、不無耿耿。耕宇特覓良工拓、得泰山銘全本分棧三冊、謹贈。我

公用作紀念藉、以伸我欽仰之忱云爾。

中華民國廿年双十節、古閩林耕宇謹識。

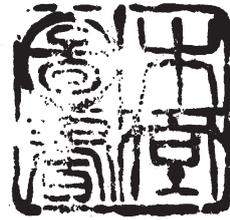
### 文化先河

泰山銘は唐の開元十に四有る載、明皇（六代皇帝・玄宗）の書す所なり。厥の碑、泰岱の顛の東嶽廟の背に立つ。結構は謹嚴にして、頗る芸林珍賞たり。民国十八年、中華開国大總統孫先生奉安の際、木堂老翁、友誼の關係を以て、特に來華し典禮に参加し既に竣んぬ。道すがら青島に出で、泰岱・曲阜を游歴し、名勝を徧覽し、碑碣を摩挲す。世に盛称する所の金石峪の石刻を獲見すると雖も、而るに時間、氣候の繋ぐ所に因り、未だ絶頂の磨崖を尋ね覽ること能はざることを憾と為す。維の時、耕宇、杖履に追隨し、公と談ずること東方文化に及び滔々として絶えず。此に於いて公の志趣を見るなり。然るに蠟屐して経る所、尚ほ未だ泰山銘の豐腴にして工整たるを觀ざること、耿耿を無すことあらず。耕宇、特に良工の拓を覓め、泰山銘全本を三冊に分ち棧し、謹みて贈る。我、公の紀念の藉を作すを用し、私の欽仰の忱を伸ばすを以てするのみ。中華民國廿年双十節、古閩林耕宇、謹みて識す。

印文は、次の通りであり、原寸大で掲載する。



「林耕宇印」(2.1×2.2cm)



「木堂図書」(2.8×2.9cm)



「方寸耕」(2.3×1.1cm)



「耕余翰墨」(2.1×2.1cm)

「木堂図書」は、三冊すべてに押印されており、「林耕宇印」・「耕余翰墨」は各外題の他、第一冊の跋に、「寺耕」は跋の引首印である。

## 二、経緯について

跋者の林耕宇は、岩谷将氏の著書に拠ると、一八九三年、福建省台湾省台湾県(台中)の出身である(「古閩」とあるのは、出自に由来する)。一九二五年、上海南方大学文学系を卒業、一九三二年、第二師師令部経理処長に就いた。そして一九三七年、冀察政務委員会外交委員会専門委員となり、所謂「盧溝橋事件」発端のキーパーソンとして知られる。一九三九年には、青島特別市市公署における市長選任の市政委員八名のうちの一人にその名前が見える<sup>6)</sup>。

その後の林は、終戦後の一九五二年迄に故郷・台湾へ戻ったようで、青島の湛山寺の高僧であった慧峰法師を台南の湛然寺へ招聘するなど、晩年は仏教に篤い人物であった<sup>7)</sup>。また、この事実により、一九五二年には生存していたことも分かる。

跋に拠ると、林は犬養毅の中国訪問に追隨したとある。犬養の目的は、昭和四年(一九二九)、中華民国の初代総統である孫文の移樞式に参列するためであった。その後、中国に於ける旅程を、同行した近藤達児(一八七五～一九三一)の著書『孫文移靈祭の記』<sup>8)</sup>、清水銀蔵(一八七九～一九三七)の著作「木堂先生随遊記」<sup>9)</sup>、そして『東京朝日新聞』の記事を元に記すと、次のようになる<sup>10)</sup>。

五月 二十日 東京駅を出発

同 二十一日 神戸から上海へ向けて出航

同 二十三日 上海に到着  
 同 二十七日 南京へ移動  
 六月 一日 移枢式参列  
 同 三日 蒋介石自邸への招待を受ける  
 同 四日 上海へ移動  
 同 八日 青島へ出航  
 同 九日 青島に到着  
 同 十一日 青島を出航  
 同 十二日 済南に到着、泰安に移動・見学  
 同 十三日 曲阜へ移動、師範学校にて講演  
 同 十四日 北京へ移動  
 同 十五日 天津を経て北京に到着  
 同 十七日 北京・故宮博物院を見学  
 同 二十八日 帰国の途につく（七月三日帰国）

犬養が泰山を訪れたのは、昭和四年六月十二日である。その三日前の九日に青島を訪問しており、この日以降、犬養に追隨していたようである。泰山では、跋にある通り、「金石峪石刻」、即ち「泰山金剛經」は見学できたものの、時間の都合により、その先にある「紀泰山銘」迄は見る事が出来なかったという。

その経緯を、清水の著作を中心にとめておくと、十二日午前八時に済南を出発し、泰安駅への車中（食堂車）にて昼食をとり、十一時に到着する。一行は着くなり泰山へと向かい、輜（清水の註釈には「山登りの輜、一種特異なもの」とある）にて移動した。近藤の記録に拠れば、「此行済南より四五人の参加した人があって一行二十名に近」い大所帯であった。一行は、岱宗坊の本門を過ぎ玉皇

閣に到り、一天門を入れて万仙楼を過ぎ、更に登山して経石峪（泰山金剛經）に達したという。経石峪を間近で見た犬養の様子は、「洵に雄大なる当時の企てを追想致され候」と記されている。その時、既に午後三時を過ぎており、頂上に登れば日没を迎えることとなり、また宿泊施設もないことから下山を余儀なくされた<sup>11)</sup>とある。

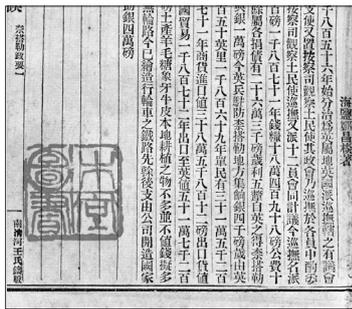
なお近藤の記録には、経石峪の見学に際し、「木堂翁歎賞」の後、続けて「泰山は之れで沢山だ、他は見る程の物でもない」と述べた<sup>12)</sup>ともある。

続けて十三日、午前四時より泰安から曲阜へ移動し、現地の孔子廟などを墓参後、同地の師範学校にて講演会を開いた。午後五時には汽車で移動したので、僅かな滞在時間となった。孔子墓参の記述の中に、「青島よりは林耕宇の案内役として来るあり」とあり、こ<sup>13)</sup>こまでの旅程に、林耕宇が確実に同行していたことが確認できる。跋文に「公と談ずるに東方文化に及び」とあるのは、曲阜の師範学校の講演会の内容を受けてのものである。

以上、犬養の中国訪問における記録をまとめた。そして、この紀泰山銘拓本は、追隨した林耕宇により、その二年後の昭和六年（一九三一）十月十日、犬養へと贈られ、彼の要望に拠り、林自身が跋文を記したものである。その経緯を語る跋の内容は、実際の動向とほぼ一致するものである。この拓本は、林が「特に良工の拓を覓め、泰山銘全本を三冊に分ち裱し」たもので、犬養のために装丁された特別なものである。犬養は、「蘭亭序」「九成宮醴泉銘」等の拓本<sup>14)</sup>を所蔵していた他、近年には「多胡碑」の拓本を求める書簡<sup>15)</sup>も発見されている。犬養が紀泰山銘の拓本を得、それを所蔵したことを示す所蔵印が押された本拓本は、他に例を見ない貴重な作品といえよう。



『小方壺齋輿地叢鈔 補編』と『同 再補編』



「木堂図書」の蔵書印

## おわりに

観峰館が所蔵する紀泰山銘拓本について、本稿ではその跋文の内容を示し、犬養毅の所蔵となった経緯を明らかにした。犬養の所蔵を外れた後、この拓本が当館に所蔵された経緯は未詳であるが、他の書籍類の購入経緯から推測すると、大阪・京都・神戸の古書店よりまとまった「資料」として購入したものと考えられる<sup>16)</sup>。

観峰館には、同様に「木堂図書」の蔵書印が押された『小方壺齋輿地叢鈔 補編』全四冊、『同 再補編』全十六冊を所蔵している。この両者が一連の「資料」であったかどうか、購入の際の記録は残っていないものの、『小方壺齋輿地叢鈔』の諸本には、「泰山旅行記」を収めたものがあり、清時代の紀泰山銘他の磨崖碑に言及する書物として貴重である。紀泰山銘に関わる資料として犬養が所蔵していたと考えれば、一連の資料群として購入したと考えると差し支えないであろう。

最後に、観峰館所蔵作品には、本稿や拙稿で言及した書籍資料の中に貴重かつ稀少なコレクションが含まれている。「玉石混淆の資料の中に稀にある重要なもの」と揶揄されることもあるが、創立者・原田観峰が分け隔てなく一括で購入してきたことに大きな意味がある。今後も引き続き、コレクションの「特性」を理解し、資料調査の成果を本稿等で明らかにしていきたい。

## 【附記】

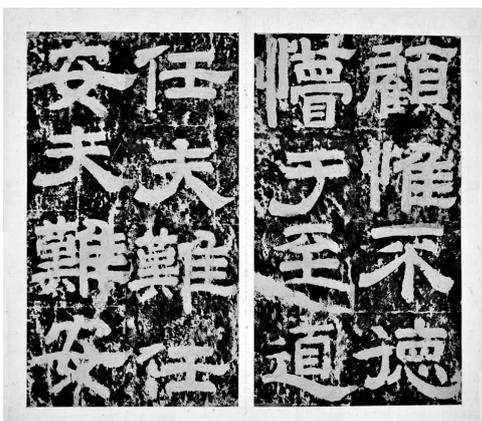
観峰館ホームページでは、本稿で取り上げた「紀泰山銘」拓本全冊を公開しています。併せてご利用ください。

〔注〕

- (1) 資料番号は、拓整―0049。
- (2) 成田山書道美術館開館特別展示パンフレット『原拓紀泰山銘および泰山景観』（一九九二年）参照。
- (3) 東京国立博物館特別展『顔真卿―王羲之を超えた名筆―』（二〇一九年）参照。東博本は軸装であり、江戸時代の文政二年（一八一九）、伊藤久政が公命を奉じて装丁したものであるという。
- (4) 他に、竹村則行氏が寄贈した九州大学中央図書館所蔵本がある。竹村則行『唐玄宗 紀泰山銘研究―原拓と解釈―』（花書院、二〇一三年）も併せて参照。
- (5) 資料番号は、碑―大―003。折帖の装丁であり、法量は、四四・八×二五・五センチ。外題は、原田観峰が書いている。
- (6) 青島特別市公署編『二年大事記 青島特別市公署成立週年記念』（青島特別市公署、一九四〇年）参照。
- (7) 国立台湾大学・台湾仏教數位博物館「仏教人物」内「煮雲法師」項 (<https://buddhism.lib.ntu.edu.tw/museum/formosa/people/1-zhu-yun.html>) 参照。この他、青島市内に現存する湛山寺の山門・階段を一九四五年に竣工した際、その寄進をした人物として知られる。
- (8) 近藤達児『孫文移靈祭の記 附―新支那旅行記』（非売品、一九二九年）
- (9) 清水銀蔵「木堂先生随遊記」『木堂雜誌』第六卷九月号、一九二九年）
- (10) 『東京朝日新聞』昭和四年は、同志社大学所蔵の縮刷版（請求番号 p071/TT14）を参照した。
- (11) 注（9）「第十五信」十四・十五頁。
- (12) 注（8）「泰山」九十六頁。
- (14) 注（3）作品No.14・32。
- (15) 「上毛新聞」二〇二二年一月二十日付「犬養毅、多胡碑に関心 旧赤堀出身政治家へ拓本依頼 直筆の手紙が発見」(<https://www.jomo-news.co.jp/articles/-/59486>) 参照。
- (16) 拙稿「近代歴史教科書における藤原道長の評価―観峰館収蔵コレクションからみた―」（『観峰館紀要』第八号、二〇一二年）、注（25）及び「付 観峰館収蔵歴史（日本史）コレクションについて」参照。なお、

犬養に同行した清水銀蔵は、大阪の出身で、滋賀県選挙区より立憲政友会公認で衆議院議員に二度当選し、地域所縁の人物だということも付け加えておきたい。想像を逞しくすれば、犬養より清水へ譲渡され、その後、古書店へと売却されたという経緯も想定できよう。

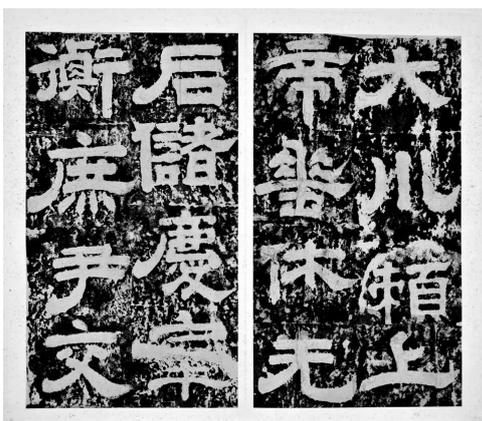
(17) 資料番号は、影―善活―054。王錫祺編纂による地理書で、光緒二十八年（一九〇二）出版。当館本は一冊の法量が一九・二×二・五センチで、専用の箱がある。この内、補編四、再補編一に、同様の「木堂図書」印が押されている。



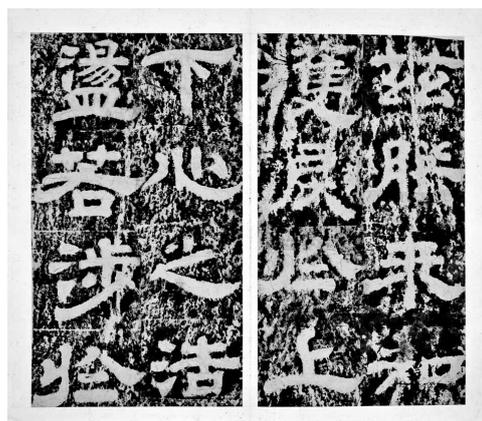
同 上册第二開



紀泰山銘 上册第一開 (碑一大-002)



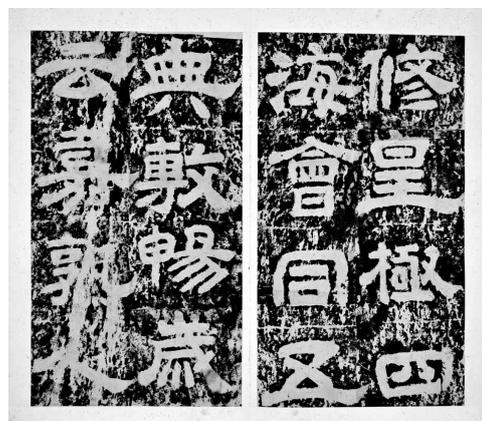
同 上册第四開



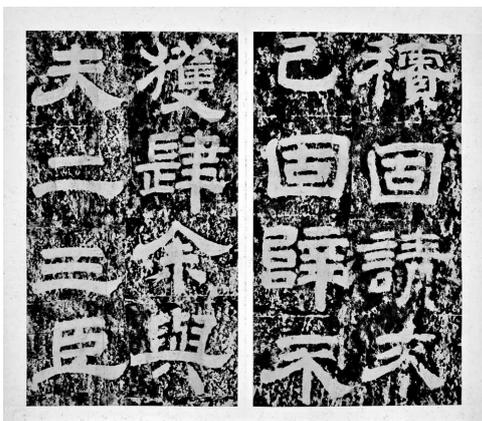
同 上册第三開



同 上册第六開



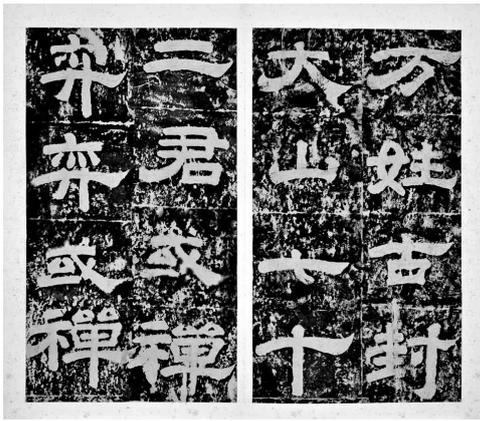
同 上册第五開



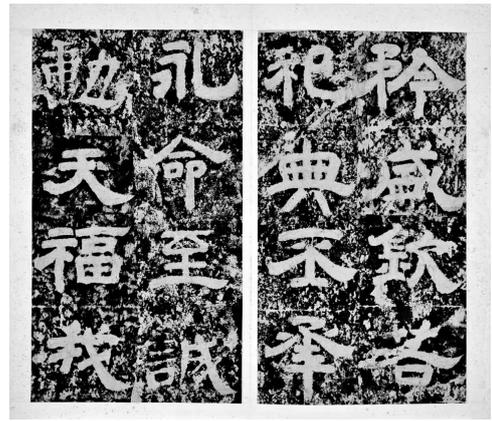
同 上册第八開



同 上册第七開



同 下冊第十六開



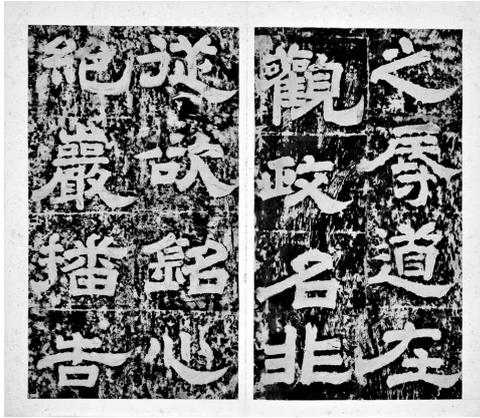
同 下冊第十五開



同 下冊第十八開



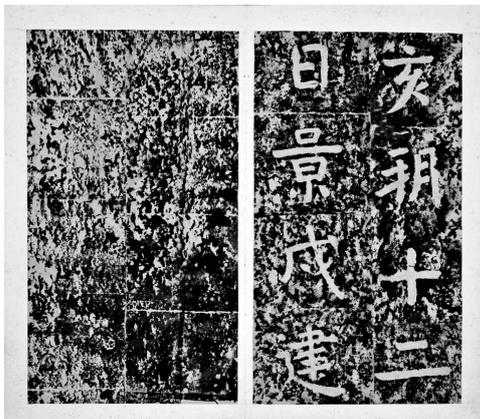
同 下冊第十七開



同 下冊第二十開



同 下冊第十九開



同 下冊第二十二開



同 下冊第二十一開